

(論文内容の要旨)

本論文は、「私」というものと、身体や症状など自分に属するものでありながら「私」の意識とは離れたものとの関係性について考察したものである。それは、自分の一部であるゆえに完全には避けることも拒むこともできないものどう付き合うのかという問題と重なる。このテーマに対して、本研究では、室内画という描画法を用いて検討を行っている。

第一章では、「私」の中に裂け目や差異を内包した諸概念を概観した。本研究では「主体」という概念が適切と思われたが、実体を持たない主体は論述の対象となりにくいため、本論文では、語る主体を指し示す<わたし>という言葉、主体の器として用いている。本論文の目的は、「それ自身が語る、私であって非私であるもの」と「語る主体としての<わたし>」との関係に焦点を当て、その在り方の多様性に迫ることにある、と示された。

主体が生じるところの裂け目とは、人間の二つの存在様式、「アル」と「イル」の差異とも呼応していると思われる。そして、「いる」場所を対象化して「見る」という行為において、その「まなざし」に主体が現れてくると考え、主体の在り方を捉えるために室内画を用いた。室内画とはその名の通り、室内＝部屋の中を描いてもらうものだが、部屋は身体と同様、私を包む「居場所」であると同時に、部屋の^{しつら}設えや醸し出す雰囲気などによって、私を指し示しているものである。本研究は、居場所へのまなざしを分析することによって、<わたし>の在り方を捉えようと試みている。

第二章では、「住まい」としての室内空間に「いる」体験とはどのようなものであるのかを探るべく、家屋の起源を問う。住まい内部の^{しつら}設えや気配は、それを行った住み手の意識を超えて、住み手の期待や願望、志向性を映し出している。自身は気付かずとも家屋空間には住み手の主体が織り込まれており、その場所に「いる」間は、否定の契機がないため、私自身に目を向ける必要がないといえる。「住まい」にいるとき、「私」とその空間は主客の区別なく一体化していると同時に、主体の織り込まれた家屋は、主体を指し示してもいるのである。

第三章では、室内空間を「描く」ときに描き手は何を求められ、またその絵を他者はどう受け取っているのかについて、検討を行った。具体的にはまず、空間を「描く」際に最も個人差が現れ、解釈の着目点となる「空間構成」を取り上げ、その解釈観点の意義と問題点について考察を進めた。空間を描くとき、描き手は二次元平面に三次元空間を表現することを求められ、一つの全体を作ることや、一つの視点を貫くことが評価される。本論文では、透視図法以外の遠近法や、構成に対する投影の働き、触覚的体験様式などを紹介し、「描く」際の描き手の体験により近づくことを目指して解釈観点の検討を行った。

第四章では、「描く」行為によって生じた、室内空間に「いる」私と室内空間を「見る」私との動的関係が、描画における「まなざし」にどのように現れてくるかを検討した。その際、空間構成上の特徴である境界線とはどのような役割を果たしているのかについての検討を行った。

次に事例の検討に入った。「いる」私と「見る」私の関係で見ると、Aさんの場合は空間に「いる」私としての主体が弱く、いっぽうBさんの場合は移動するまなざしで、全体を統べる「見る」私としての主体が弱いように思われた。事例A、Bどちらの室内画も、複数の視点からの見えが一枚の絵に混在していたが、室

内画を描くにあたっては、描くアイテム毎に、「いる」私と「見る」私の関係が生じているため、一つのパースペクティブにまとめるのが困難となる。次に、正面方向のみを描いた事例 C の室内画を取り上げ、複数の体験が一つのパースペクティブのもと、〈わたし〉の体験としてまとまるには何が重要となるのかを考察した。同時に施行したロールシャッハ・テストからは、「私のものであり図版(他者)のものである」とする超越的観点からの把握が困難な状況が示された。複数の「いる」私の体験を一つのパースペクティブのもとに収めるには、複数の視点を行き来し、かつ同時に見通せる超越的な視点に立つ主体が求められることが示された。

第五章で取り上げたのは、身体的不調や症状という「非私」性を抱える人々の室内画である。はじめに、過換気症候群患者群、不定愁訴症候群患者群、非臨床群の三群で、室内画の空間構成について比較検討を行った。その結果、過換気群では室内を「全て見せる」傾向の絵が有意に多く見られ、内的空間に「住まう」ことが困難な状況が推察された。いっぽう不定愁訴群では、「境界線なし」の絵が有意に多く見られ、空間と切り離されていない主体の在りようが示唆された。次に、個別に事例を取り上げて検討を行い、主体の在りようの多様性を示した。これらの事例が示しているのは、単に彼らが特異な描き方をしているということではない。それぞれが「非私」性の強い身体に住まう中で、主体を取り戻そう、あるいは身を守ろうとする、“生の戦略”(中井, 1971)をとっており、それが描画のまなざしに現れていると考えられた。

第六章では、「それ自身が語る、私であって非私であるもの」と「語る主体としての〈わたし〉」との関係がどのような在り方をしているのか、その多様性について、総合的な考察を行った。第一章から第五章までの各研究を振り返りながら、室内画におけるまなざしの多様性はどこから来るのかを考えてみると、複数のアイテムをいかに一つの画面に収めるかの方略の違いによって、さまざまな描き方となっていると考えられた。まなざしの多様性をもたらすものとは、体験を〈わたし〉が抱える方略の違いであり、器としての〈わたし〉の多様性といえよう。本論文では多様性にとどまって、室内画のまなざしをもとに、さまざまな主体の在りようについて考察を行った。語るのは、近代的自我主体だけではないのであって、「それ自身が語る、私であって非私であるもの」との関係性は、実に多様なのである。主体のありようをこのように捉えていくことは、“より動きを持った、力動的なものとして心理的問題を捉えて”いくことにつながると考えられた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「私」というものと、身体や症状など、自分に属するものでありながら「私」の意識とは離れたものとの関係性について考察したものである。それは、自分の一部であるゆえに完全には避けることも拒むこともできないものとどう付き合うのかという問題と重なる。このテーマに対して、本研究では、室内画という描画法を用いて検討を行っている。

第一章では、「私」の中に裂け目や差異を内包した諸概念を概観したうえで、本論文の目的は、「私であって非私であるもの」と「語る主体としての<わたし>」との関係に焦点をあて、その在り方の多様性に迫ることだとされた。また、本論文では、人間の二つの存在様式、「アル」と「イル」の差異に注目し、「いる」場所を対象化して「見る」という行為において、その「まなざし」に主体が現れてくると考え、主体の在り方を捉えるために室内画を用いた。

本論文のテーマとするところは、興味深く、また心理臨床において非常に重要なものであるが、本論文の対象とする「私」の二重性、あるいは、「主体」は、はなはだ捉えがたく、ともすれば抽象的な把握に陥る危険性をもつものである。それに対して、本論文は、「室内画」という、そこに「住まう」側面と、対象化して「見る」側面の両者を併せもった「室内」を描かせた点に特徴がある。室内画とはその名の通り、室内＝部屋の中を描いてもらうものだが、部屋は身体と同様、私を包む「居場所」であると同時に、部屋の^{しつら}設えや醸し出す雰囲気などによって、私を指し示し、さらにそこへのまなざしを分析することによって、<わたし>の在り方を捉えうる手法なのである。

第二章では、「住まい」としての室内空間に「いる」体験とはどのようなものであるのかを探るべく、家屋の起源を問うている。一方、第三章では、室内空間を「描く」ときに描き手は何を求められるのかを検討している。空間を描くとき、描き手は二次元平面に三次元空間を表現することを求められ、一つの全体を作ることや、一つの視点を貫くことが評価される。しかし、本論文では、そうした透視図法以外の遠近法や、触覚的体験様式などを紹介し、「描く」際の描き手の体験により近づいた、多様性をもつ解釈観点を提供している。

続く第四章では、「描く」行為によって生じた、室内空間に「いる」私と室内空間を「見る」私との動的関係が、描画における「まなざし」にどのように現れてくるかを検討している。ここでは、細やかに検討を行うべく、事例をとりあげ、複数の「いる」私の体験を一つのパースペクティブのもとに収めるには、複数の視点を行き来し、かつ同時に見通せる超越的な視点に立つ主体が求められることが示された。

第五章で取り上げているのは、身体的不調や症状という「非私」性を抱える人々の室内画である。過換気症候群、不定愁訴症候群の患者と、非臨床群の比較をおこない、描かれた室内画には、それぞれにその主体のあり様が如実に示され、それぞれが「非私」性の強い身体に住まう中で、主体を取り戻そう、あるいは身を守ろうとするさまが映しだされた。最後の第六章では、「それ自身が語る、私であって非私であるもの」と「語る主体としての<わたし>」との関係がどのような在り方をしているのか、その多様性について、総合的な考察を行っている。

試問においては、タイトル(副題)にある、「<わたし>の在り方の多様性」に果たしてどれ

ほど迫りえたのか、むしろ、「室内画」にもっと注目し、心理学論文としてのスタイルを貫いたほうがよかったのではないかと、という指摘を受けた。しかし、捉えがたいテーマに対して「室内画」の手法で迫ったことは意義あるアプローチであり、本論文の意義を損なうものではないと考えられた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年4月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。